慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	音楽の曼荼羅 : 普遍学としての「音楽」に向けて
Sub Title	Mandala of music : toward a universalism of "music"
Author	粂川, 麻里生(Kumekawa, Mario)
Publisher	慶應義塾大学アート・ センター
Publication year	2018
Jtitle	Booklet Vol.26, (2018.) ,p.7- 12
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	序論
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000026-0007

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

音楽の曼荼羅
普遍学としての「音楽」に向けて

粂川　麻里生

はじめに

「音楽とは何か」と問われたら、現代の人であれば、「芸術の一ジャンル」「音を用いた芸術表現」「音によるエンターテインメント」といった答えを返す人が多いのではないだろうか。しかし、「芸術」あるいは「娯楽」としての音楽理解は、いずれもいわゆる「クラシック音楽」が確立した19世紀ヨーロッパ的なものだ。「音楽 music」という概念ははるかに古い。ヨーロッパ最古の文学であるホメーロスの『イーリアス』は「ムーサよ歌え」という言葉から始まるが、「ミュージック」とはこの詩と音楽の女神たちである「ムーサ」が司る営みであった。それは詩と音楽が一体となった根源的な営為であり、世界の始源であった。

それゆえ、ヨーロッパでは古代から中世を通じて、音楽は芸能であるだけでなく、基礎的な学問のひとつであった。リズム、ハーモニー、旋律、旋法、音色、韻律、語法等々についての経験と知は、他のあらゆる知的領域に応用されうる普遍知としてのステータスが認められていた。しかし、ヨーロッパだけではあるまい。わがアジアを含む世界中の多くの民族と文化圏において、詩と音楽は文化と生活の出発点であり、根源であった。中国でも、日本でも、最初に文字となった言葉は「歌」であった。歌は生活を支える力であり、共同体のしるしであり、世界を把握するための神話にして学問であった。

しかし、われわれはいつしか、学問を散文と記号で行うようになってしまった。記号はもとより、概念にしばられる散文もまた、人間の経験のリアルな身体性に肉迫するものではない。しかし、ウィトゲンシュタインが明言したように、言葉の根源には「行為」がある。本物の言葉は行為であり、学知の根本もまた身体性をともなった行為である。そういう言葉は「意味」を担う記号にとどまるだけのものではない。リズム、強弱、響き、濃淡など、あらゆる音楽性と身体性を伴ったもの、むしろ音楽そのものであろう。

われわれは、学知の基底としての詩と音楽を再発見しなければならない。散文的で、「意味」だけにしばられた学問では、人間を真に幸福にする世界観は表現できないだろうし、社会や人間関係を根本から洞察することもできないだ

ろう。「楽（がく）」はなぜ「ラク」で「たのしい」のかも、「music」を知の基礎として見つめ直す時に、見えてくるに違いない。

今号の Booklet は、そのような学知と芸術を結ぶ関心において、慶應義塾大学アート・センターをはじめ、本学の様々な機関・講座等において「音楽」に関係する研究・教育に関わってくださっている方々に執筆や対談、座談会をお願いした。執筆者や話者の専門領域は非常に多岐にわたっている。しかし、それはすべて「ムーサ」の営みゆえ、どこから入っていっても必ず「全体」へと繋がっていくような、全てが全てに有機的に結びついた音楽の曼荼羅である。以下、各記事に即しながら、「music」が導いてくれるはずの普遍的学知の輪郭をデッサンすることを試みてみたい。

ジャズのインパクト

本冊子には直接ジャズに関する論考こそ掲載されてはいないが、われわれのプロジェクトは「ジャズ」から始まったと言える。慶應義塾大学には「ジャズの伝統」がある。第二次世界大戦前にすでにわが国最初のジャズのレコードが吹き込まれているが、それは慶應義塾大学での学生時代にジャズ演奏を楽しんだ人々が行なったものだった[★1]。戦後においても、北村英治氏、大野雄二氏、村井邦彦氏などをはじめ、ジャズさらには広くポピュラー音楽全般へと大きな活躍を展開した卒業生も多く、それは現在にまで続いている。また音楽評論においても油井正一氏は、ジャズ評論の嚆矢として大家をなした。ポピュラー音楽、とりわけジャズは、20 世紀以降の世界において、各文明圏、諸民族を横断する形で普及した文化の一大潮流であり、西洋古典音楽とは違った意味での大きな普遍性を持っている。油井氏のジャズ研究は、そこに重きをおいていた。しかしながら、わが国の大学をはじめ、諸研究機関において、文化現象としてのジャズを学問的に研究しようという部門は少なく、その規模も小さい。各大学において、文学研究者や人類学者、歴史学者などが、「副業」のようにして研究をしているのが現状である。そのような状況の中、1998 年に逝去した油井氏のご遺族が、同氏の残した膨大な資料を慶應義塾大学に寄託したことによって、本学アート・センターに「油井正一アーカイヴ」が構築されたことは、学内外のジャズ研究家・愛好家・関係者にとって極めて重要な出来事として受け止められた。というのも、2011 年から一般閲覧も始まった油井アーカイヴには、その後も各方面から重要なジャズ関連資料の寄託・寄贈が続いているからだ。同年度からは、油井氏の弟子筋にあたり、やはり慶應義塾にも学んだ音楽ジャーナリスト・中川ヨウ氏をアート・センター訪問所員に迎え、各種講演会やレクチャー・コンサートにも力を入れるようになっている。同じく訪問所員にご就任いただいている佐藤允彦氏、菊地成孔氏、大谷能生氏にも折に触れてご協力いただいている。近年ではジャズの普及・教育に多面的な協力を行なっていることで知られる株式会社セイコー・ホールディングスならびに服部真二文化・スポーツ財団より特別協賛を受け、さらに多くの催事を多彩なゲストを迎えて行うことができるようにもなってきている。

そのようにささやかとはいえ、着実な歩みを続けている慶應義塾の「ジャ

ズ・スタディーズ」ではあるが、学問的視野をもう少し広げるならば、「ジャズ」という音楽が20世紀に出現したことの最大の意義は、油井正一のドイツにおける盟友であった、音楽研究者にしてプロデューサーのヨアヒム・ベーレントも主張していたように、人類を「音」や「響き」のより根本的な次元に立ち返らせたことにあった。ジャズは、本当は、単に黒人音楽の要素をとりいれたアメリカの大衆音楽ではなく、本冊子の森下隆氏による論考で詳細に描出されているように、「譜面」や「コンサートホール」から音楽をふたたび解き放ち、様々な民族音楽、ワールドミュージック、他方では現代音楽、ついにはサウンドスケープにいたるまで、人間と「音」の全方位的な付き合い方を考えるところまで、急激に地平を広げた文明の運動であったと言えるだろう。ただし、そこまでいくなら、それはもはや「ジャズ」という言葉だけでは包摂しきれなくなるのかもしれない。われわれの探求は、ジャズ・スタディーズから始まったものであり、そこから直接導き出されたものではあるが、それはやはりmusicとしか呼びようがないものだ。それゆえ、2017年、油井正一アーカイヴの研究会「拡張するジャズ」は「mandala musica」と名称を変更した。

湯浅譲二氏と人類学的探求

そのような意味で、慶應義塾大学アート・センターの音楽研究が2010年以来、作曲家・湯浅譲二氏の訪問所員としてのご協力をいただけていることも、きわめて意義深いことである。慶應義塾大学医学部の学生から転じて作曲の道を歩き始めた時から現在にいたるまで、湯浅氏は一貫して「人類」にとっての根本的な営みとしての音楽、人類が生存し生活する基盤としての「コスモロジー」を表現するものとしての作曲を探求してきた。「内触覚的宇宙」を表現しようとするピアノ曲群は、湯浅氏の生んだ現代の古典とも言える作品だが、これを湯浅氏の指導のもとで演奏するワークショップ（2010年）と講演会（2011年）以来、当センターの音楽研究グループは、湯浅氏の「人類学的」な音楽観に指導されつづけているとも言える。それは上述の「ジャズ・スタディーズ」から出発する探求とも矛盾なく融合するものであるが、さらに湯浅氏は当センターが資料アーカイヴを運営している瀧口修造のもとに集った前衛芸術家集団「実験工房」の重要メンバーでもあった。芸術を拡張する作業である「前衛」と、人間存在の普遍的根底を見つめる眼差しを、まさにわれわれは湯浅氏から継承したいと願うものである。

クラシカルな楽器だけでなく、各種電子音源も含む多様な「音」を用いながら、常に挑戦的かつ根本的な音楽を創造し続ける湯浅氏の仕事は、今後長い時間をかけて全体として理解され、研究されるべきであろう。本冊子では、湯浅氏を迎える当センターの催事をしばしば支えてきてくださった、やはり作曲家・指揮者の伊東乾氏が聞き手となって、そのひとつの土台となるような対話を引き出してくださった。

Pop Japan Project

筆者はアート・センターでの仕事とは別に、本学の特別講座である久保田万

太郎記念講座「現代芸術」のコーディネーターをしばしば担当しているが、この講座の講師として、2016年度にはNHKの国際放送NHKワールドの音楽番組プロデューサー原田悦志氏を招聘した。同氏には、さまざまなポピュラー音楽制作の実際について多彩なゲストも招きつつご講義いただくとともに、海外テレビ放送をはじめとする、各種メディアにおいてどのように音楽発信がなされているかについても教示いただいた。翌2017年度にはアーティストとして大きな成功を収めている宮沢和史氏、Zeebra氏に講師をお願いし、より音楽制作の現場に近いレクチャーを伺った。さらに続く2018年度は、音楽プロデューサーとして長年日本のポピュラー音楽の世界で輝かしい成功を収めてきた牧村憲一氏、藤井丈司氏に講師を依頼し、学問的研究対象としてもきわめて大きな可能性と意義を秘めている、1960年代以降のわが国ポピュラー音楽の歴史を学生たちに講義していただいた。本冊子に収められている原田氏の論考、Zeebra氏と川原繁人氏の対談、宮沢氏と南田勝也氏の対談、牧村氏、藤井氏、柴那典氏の鼎談は、いずれもこの講座の延長線上に成立したものである。

こうした、音楽業界で大きな成功を収めた華やかな方々にご協力をいただきつつ、これを一層学生たちの学びにつなげたいと考え、2016年以来、他大学学生を含む大学院生と学部生が参加する「Pop Japan Project」という研究プロジェクトを「mandala musica」の下部組織として運営している。これには二つの主眼があり、各種ポピュラー音楽関連のイベントを学内で催すと同時に、「日本音楽の海外発信」について研究を行う、というものであった。後者の研究は、当時原田氏が出向の形で所属しておられた日本国際放送（NHKワールド）の委託により、NHKの海外向け音楽番組「J-MELO」の世界中の視聴者の実態調査をアンケートにより行うというもので、2015年まで10年間は東京藝術大学の毛利嘉孝研究室が行なっていたリサーチを当センターが継承した形になる。12年にわたって蓄積された、日本のポピュラー音楽に強い関心を持つ、諸外国のリスナーたちの実態調査は非常に興味深いものがあり、近い将来、あらためて全体の成果をまとめて、より広く社会学的探求の用に供したいと考えている。

「ポピュラー音楽の国際発信」に関する調査研究は、学部学生の教育にとっても、非常に有効な機会であった。様々なメディアの発達により、国内外の産業の構造とりわけエンターテインメントや情報発信の領域におけるそれは激変し、音楽はある意味危機に瀕している。メディアという血管を流れる資本主義の本流の中で、音楽はただ消費されるものになりつつある、とも言われる。そんな状況において、今後の社会を担う学生たちには、メディアとビジネスに関する洞察を身につけた上で、社会の生命力たる「文化」を交流してゆける能力を備えて、大学から社会に飛び立っていってほしい、という意図もあった。

島唄とヒップホップ

2017年度は、上述の通り、ロックミュージシャンの宮沢和史氏とヒップホップ・アクティビスト（ラッパー）のZeebra氏に「現代芸術」の授業をお願いした。授業自体も、学生たちの熱い関心を集めるものとなったが、「課外活動」

も充実した。宮沢氏は沖縄・奄美音楽の研究家としても知られるが、三田キャンパスにて、沖縄民謡演奏家の仲宗根創氏、新垣成世氏をお招きしての沖縄民謡レクチャー・コンサートも開催していただいた。政治的な歴史とも繋がりがあるが、それでいてあくまでも美しく楽しい沖縄の民謡が、220名満員のキャンパス内北館ホールに響き渡った。沖縄の民謡いわゆる「島唄」は、「民謡」と言えば、もちろんその通りではあるが、毎年200曲を超える新作が創作される、現役バリバリのポピュラー音楽でもある。1960年代には世界中で「フォークソング」のムーヴメントが盛り上がったが、当時「新作民謡」という思想が提示したものは、いまだに十分な形で回収されてはいないだろう。われわれのプロジェクトとしては、この「島唄」の文脈は小規模であっても確実に継続し、「曼荼羅」的な音楽研究の重要なピースとしていきたいと考えている。

HipHopについてもそれは同様である。音楽を出発点とするヒップホップ・カルチャーだが、現在では「ラップ」「DJ」「ダンス」「グラフィティー」の4領域が「ヒップホップの4大要素」とされる。聴覚、視覚、身体感覚に訴えかけ、様々なメディアと接続されうるヒップホップは、まさに現代のグローバルなカルチャーの発信源であると同時に、「アート」の現在を考えるための重要な鍵でもある（ヒップホップ自体は必ずしも「アート」ではないが）。ヒップホップを考察することなしに、現代の社会と文化を考えることは困難だと言っても過言ではあるまい。Zeebra氏には学生たちとともに、三田祭（学園祭）での催事として、「ヒップホップ・ワークショップ」を開催することをお願いした。Zeebra氏本人のラップ講座に加え、DJ OASIS氏、ダンスのHORIE氏、グラフィティーのTOMI-E氏（本冊子のカバーのピエロの絵は、同氏によってこの時に描かれたものである）にご協力いただき、4部門を体験できるワークショップが行われると同時に、キャンパス中庭ステージ上では、Zeebra氏の司会進行による「ラップ早慶戦」も行われた（敵地ながら早稲田が勝利）。このワークショップは、むろん「楽しみ」を趣旨とする催事ではあったが、しかし講義と同様に、「4要素」成立の歴史、背景となる思想や文化についてもある程度は言及もされた。この新しいストリート・カルチャーを、健全かつ創造的な形で日本に根付かせようと、工夫、努力しているZeebra氏とその仲間たちの行動と思想こそが、学生たちに学んでもらいたいことでもあれば、われわれの重要な研究テーマでもあった。

あらたな「詩学」へ

2018年度の本学「現代芸術」講義は、上述のふたりの音楽プロデューサー牧村憲一氏と藤井丈司氏によって続いている。両氏は、かぐや姫、はっぴいえんど、松任谷由美、加藤和彦、シュガーベイブ、イエロー・マジック・オーケストラ、サザン・オールスターズ、竹内まりや、フリッパーズ・ギターといった、時代の先頭を走った音楽グループの現場に常にい続けた名プロデューサーだが、両氏の講義を聴くほどに、1960年代から80年代にかけて、日本のポピュラー音楽の世界で起こった文化の変容には重大なものがあったと感じさせられる。

それは、「大衆のための歌」である「歌謡曲」の中に、独特の洗錬度を備えた「都市型ポップス」が成立していった過程でもある。この「都会的」というところが、大きな問題なのだ。流行歌において、人はどういうものを「洗練されている」と感じるのか、そこには根本的かつ多次元的な文化研究の一大焦点がある。ポップスが「都会的になる」ためには、どれほどの要素が必要だろうか（そもそも「都市」とは何なのか？）。歌詞、節回し、発声、リズムやビート、サウンド、ルックス、日頃の言動、ありとあらゆる要素が関わってくるはずだ。現代において「ハイセンス」であることがいかに決定的なことであるかは言を待たないであろうが、それは「近代」そして「欧米化」を経たわが国の文化が何を目指してきたのか、さらにどこに向かおうとしているのかを考える際に重要な手がかりになるテーマでもあるはずなのである。

やはりホメーロスの叙事詩と同じなのだ。ムーサは、根本的なところで、われわれと世界に命を吹きこみ、動かし続けている。「うた」であると同時に、文化とその表現のすべてが結晶化したものであるという点で、『イーリアス』や『オデュッセイアー』とポピュラー音楽は同様のアプローチを待っている。

註

★1 ――瀬川昌久＋大谷能生『日本ジャズの誕生』青土社、2008年。

（くめかわ　まりお・副所長、慶應義塾大学文学部教授／ドイツ文学）